

24. C-peptide 測定法と病態における 2,3 の考察

萩原 康司 小島 孝志

沖田 芳夫

(北海道社保中央病院・放部)

C-peptide の測定は、力価の高い抗血清が得られるようになり、急速に発展してきた。

われわれは、第一 RI 研究所の C-peptide キットについて、その測定法と病態について 2,3 検討した。測定法では、原法で充分で、insulin に比べて操作上の安定性と特に再現性に優れており、正常範囲も、成人ドックの空腹時で 2.75 ± 0.88 ng/ml であった。(50 g OGTT 時は省略)

また糖尿病患者の病態についての検討では、診断および治療指針の有力な検査法の一つであると考える。

今後は、さらに併行してインスリン抗体・遊離インスリン・総インスリンの測定が重要になってくるものと考ええる。

25. 肝疾患における血中グルカゴン測定の意義

鬼原 彰 菊池 晃

野尻 義男 細川 英明

大原 弘通

(札幌医大・1内)

目的・方法：肝障害時の血中グルカゴン動態を知るために臨床的および実験的研究を行った。臨床的には諸種肝疾患にアルギニン点滴静注負荷を行い、実験的には CCl_4 肝障害ラットを作製し、同様にアルギニン負荷を行った。

血中グルカゴン測定は polyethyleneglycol を用いた RIA により行い、豚グルカゴン特異抗体は 30K を使用した。

成績・結論：アルギニン点滴静注に対する血中グルカゴン反応は肝硬変症で最も高い反応を示し、ついで慢性肝炎、急性肝炎の順に高反応を示し、いずれも正常対照群に比較して有意の上昇を認めた。一方 CCl_4 肝障害ラットのうち急性群の血中グルカゴンはアルギニン刺激に対して対照群と差

異を認めなかったが、慢性群では有意の高反応を示した。以上よりアルギニンに対する血中グルカゴン反応は肝病変の進行とともに高くなることが明らかとなり、障害肝細胞の病態・機能と密接な関連性をもつことが推測された。

26. 旭川医科大学、放射線部核医学部門における 4 ヶ月間の診療経過

小川 善輝 西部 茂美

三橋 英夫

(旭川医大・放部)

52年4月、核医学部門開設以来4ヶ月の診療経過をみると外来患者の増加に伴って依頼も増加してきた。4月と8月との比は IN VIVO 8割増、IN VITRO 7割増で今後もこの傾向はしばらくの間続くと思う。IN VIVO では動態検査が全件数の 22% を占めているが今後心 Angiography の増加を考えると比率はより高くなるであろう。形態検査では肝シンチに次ぎ骨シンチが多くなっているのも目立つ点である。IN VITRO は処理件数の伸びは良くないが、これは、スタッフ不足の理由により開設当初より検査項目を3つにおさえたこと、IN VIVO との兼任で非能率的であったこと、が理由として考えられる。今後の予想としては心 Angiography の増加、外来レベルの件数増加等であり、課題は、中央部門としての性格上、IN VITRO の充実にも力を注がなければならない。またスタッフ増員も考えなければいけないと思う。